

中世後期における聖人崇敬 — 一時禱書における執り成しの祈りとその神学的解釈について —

下園 知弥



図1 「フランス時禱書[全使徒への祈り]」(西南学院大学博物館蔵)

序 論

聖人へ祈るという行為は、キリスト教の諸教会において広く伝統的に行われてきた信仰活動である。西欧中世においても、多くの信徒が聖人へ祈りを捧げており、その実践者には聖職者や修道士だけでなく平信徒たちも含まれていた。そのことは現存する当時の時祷書が証明している。というのは、平信徒が主要な所有者であり「中世のベストセラー」¹とまで評された時祷書には「執り成しの祈り」(suffrage)が収録されていたからである。

時祷書における執り成しの祈りは、ラテン語で「支持」(suffragia)や「記念」(memoriae)とも呼ばれており、その言葉通り、聖人たちを支持・記念しつつ神への執り成しを請うことがこの祈りの主眼とされている。時祷書は13世紀から16世紀にかけて西欧で盛んに製作・使用されており、特に活版印刷術の普及以後は多くの職業の信徒たちがこれを所有していた²。そして時祷書の多くは、基本的要素として執り成しの祈りを収録していた³。つまり、時祷書の時代には、聖職者に限らない広範な社会階層の信徒たちが執り成しの祈りを知っており、また実践していたのである。

時祷書における執り成しの祈りがどのような形式・特徴を有しているのかという点については、Wieckをはじめとする多くの時祷書研究者が既に論じている⁴。また、この祈りの対象となっていた諸聖人に対する当時の崇敬についても、数多くの個別研究が存在する。しかしながら、この種の祈りが当時の人々からどのような信仰活動として評価されていたのか、とりわけ教会の神学者たちからどのように解釈されていたのかという問題については、時祷書や聖人崇敬に関する研究領域ではまとまった議論がなされていない。

カトリックの信仰内容を鑑みれば、正統に属する神学者たちは聖人への執り成しの祈りを肯定的に解釈していたと見るのが妥当であろう。というのも、この種の祈りは聖職者や修道士が用いる聖務日課書やミサ典書にも記されており、神学者自身がその実

践者だったからである。実際、カトリック教会は近代のトリエント公会議において、聖人に執り成しを祈ることを自らの信仰内容として宣言している⁵。しかしながら、この公認が行われる以前、公会議によるお墨付きが無かった時代には、カトリックの神学者たちはどのような「根拠」に基づいて聖人に執り成しを祈るという行為を正統な信仰活動として認めていたのであろうか。また、その行為にはキリスト教信仰にとってどのような「意義」(信仰的意義)があると考えていたのであろうか。これらの問いは、当時の信徒たちに向けられていた神学者たちのまなざしを知る上でも、近代になってカトリック教会が改めて聖人の執り成しを自らの信仰内容として認めた理由を知る上でも、非常に重要な問いである。

本論文の目的は、中世後期⁶に信徒たちの間で流行していた聖人崇敬の行為——すなわち、聖人への執り成しの祈り——について、13-15世紀に活躍した神学者たちの解釈を整理して提示することにより、先に述べた「根拠」と「意義」を明らかにすることである。具体的には、トマス・アクィナス(Thomas Aquinas, c. 1225-74)、ジャン・ジェルソン(Jean Gerson, 1363-1429)、ヘラルト・ゼルボルト(Gerard Zerbolt, 1367-98)の祈祷論を扱う。この三名を扱う理由は、彼らはいずれも時代を代表する神学者であるが、活動領域や関心が異なっており、その差異が祈祷論にも反映されているからである。すなわち、アクィナスは当時の知的世界を代表するパリ大学の教授にしてドミニコ会士の神学者であり、ジェルソンはパリ大学の総長であったが素朴な平信徒たちの信仰問題にも関心を寄せていた神学者であり、ゼルボルトは中世後期に起こった信仰運動「新しき信心」(Devotio moderna)の指導的地位にあったオランダの神学者であり、異なる社会階層の信徒たちが共に生活する共同生活兄弟会⁷の一員であった。つまり、この三者はそれぞれ異なる視点から信徒たちの信仰問題を見つめていたのであり、その差異が聖人への祈りという主題についての論述にも反映されているのである。

時祷書の流布に伴って聖人への執り成しの祈りが

ますます盛んになっていた時代、この種の信仰活動を行っていた信徒たちへ神学者たちが向けていたまなごしを明らかにすることで、聖人崇敬の歴史の一側面を補完したい。

1. 中世における「聖人」と「崇敬」

聖人への祈りに関する神学者たちの議論を見ていく前に、まずは中世という時代における聖人崇敬の状況と、その具体的な実践である執り成しの祈り(suffrage)について、本節と次節でそれぞれ確認しておきたい。本節では、中世における聖人崇敬について、「聖人」と「崇敬」という二つの観点からそれぞれ概略を提示する。

【中世における聖人概念】

聖人(sanctus)という概念は、古代においては主として殉教者を指すものであった。しかしこの概念は、次第にその用法が拡大し、証聖者(殉教者ではないが、その生涯において信仰を堅持し、卓越した聖性を示した人物)にも適用されるようになった⁸。列聖というシステム⁹が確立したのは中世半ば以降であり、確認されている限りでは、教皇による最初の列聖が行われたのは10世紀末(アウクスブルクの司教ウルリッヒの列聖)である¹⁰。それから数世紀を経た中世後期には、多くの列聖者が存在していたが、彼らは聖人と呼ばれる存在者のごく一部であり、列聖者ではないが卓越したキリスト教徒として伝統的に崇敬されてきた聖人も数多く存在していた。

さらに、聖人という概念は、上記のような卓越したキリスト教徒以外の存在者も含まれることがある。すなわち、天使や聖母マリアもこの概念には含まれ得る。むろん、天使は聖「人」ではないし、聖母マリアと神との関係は他の聖人たちとは一線を画しており、いずれも前述の聖人概念とは齟齬がある。しかしながら、sanctusという言葉を「神以外の聖なる存在者全般」を指示するものとして理解するならば、天使や聖母マリアがそこに含まれていても何らおかしくはない。そして中世における聖人概念は、

天使や聖母マリアもsanctus(sancta)と形容されており、他の聖人たちと一緒に語られることも多かった。このような広義の意味でも理解されていたと考えられる。

【中世における聖人崇敬】

崇拜と崇敬は区別された概念である。簡潔に述べれば、「崇拜」は神に対して捧げられる信心ないし信仰活動であり、「崇敬」は神以外の聖なる存在者に対して捧げられる同内容である。外見上——おそらくは個人の心情においても——この二つの行為を区別することは難しいが、少なくとも神学的には両者は峻別されている。両者の区別は中世の神学においても一般的に認められており、たとえば、東方教会においてはヨハネス・ダマスケヌスが神に対する祈り(ラトレイア: λατρεία)とそれ以外の被造物に対する祈り(プロスキュネーシス: προσκύνησις)を区別しており¹¹、西方教会においてはアウグスティヌスがラトレイアという神への礼拝(Dei cultus)とそれ以外の崇敬行為を区別し¹²、トマス・アクィナスもラトリア(latria)とデュリア(dulia)という語によって両者を区別している¹³。

プロスキュネーシスないしデュリアにあたる聖人崇敬は、中世においてはさまざまなかたちで実践されていた。聖人たちの聖遺物崇敬や特定の聖人の名を冠した教会・修道院の建造は、今日でもその痕跡を確認することができる当時の代表的な聖人崇敬である。他にも、巡礼、寄進、聖人伝の著述などの行為によっても聖人への崇敬は表されており、中世という時代は聖人崇敬が非常に盛んな時代であったと言える。

聖人への祈りもまた、中世において盛んに実践されていた聖人崇敬の一つである。聖人への祈りは、ミサ典書(Sacramentarium¹⁴など)、聖務日課書(Breviarium¹⁵)、時祷書(Horae)といった種々の祈り書に記されており、したがって当時の信徒たち(特に聖職者や修道士たち)は聖人への祈りの文句を口頭だけでなくテキストというかたちでも知っていた。そしてこれらのテキストは、元々盛んであった

聖人崇敬を更に強固なものにしていたと考えられる。

また、時祷書研究者のReinburgが「その祈りにおいて、中世後期のキリスト教徒たちは聖人たちを近親者、友人、主人と見做しつつ、彼らへ呼ばわっていた」¹⁶と評しているように、中世後期の信徒たちは祈りを通じて聖人たちと多様で濃密な関係を築いていた。たとえば、聖バルバラは祈願者にとっての女主人であり、聖アンナは女王・公爵夫人であり、或る祈願者は自身をマグダラのマリアの名付け娘と考えていた¹⁷。

このように、中世における祈願者と聖人の関係は現代に比して多様で濃密であり、その関係を支えていた主要な信仰活動が祈りであった。したがって、聖人への祈りは、中世の信徒たちにとってとりわけ重要な信仰活動であったと言える。

2. 時祷書における執り成しの祈り

時祷書という中世後期に平信徒たちの間で普及していた祈書は、聖職者たちが祈りに用いる聖務日課書と聖母マリアの小聖務をその直接の起源としている。確認されている限り、時祷書は13世紀には既に製作され始めており、15世紀以降は西欧各地の工房で大量生産されるようになり、富裕層や貴族階級に限らない多くの平信徒たちがこれを所有していた¹⁸。

本節では、時祷書に記されていた執り成しの祈り(suffrage)について、二つの主要素に絞って概略を提示する。その二つとは、祈願対象と祈りのテキストである。さらに、この二点の確認を通じて、suffrageという祈りが主として「聖人への執り成しの祈り」であったことを示す。

【祈願対象】

suffrageの祈願対象は、神(三位一体)、聖母マリア、大天使ミカエル、守護天使、洗礼者ヨハネ、使徒、聖人などさまざまである。概して言えば、キリスト教世界で普遍的に信仰されている聖人たち、そして時祷書が製作・使用された時代・地域にとりわ

け崇敬されていた聖人たちがこの祈りの主要な祈願対象とされている。三位一体の神が祈願対象の冒頭に据えられることもあるが、すべての時祷書がその構成になっているわけではない。これらの祈願対象は、特定の人物・人数に固定されておらず、時祷書によってその選出・序列は異なっている¹⁹。その多様性の一端は表1に示す通りである。

また、「すべての聖人」(omnes sancti)や「すべての処女」(omnes virgines)といった不特定の祈願対象もこの祈りにはしばしば含まれている。たとえば、西南学院大学博物館所蔵の『フランス時祷書「全使徒への祈り」』(図1)は「すべての使徒」(omnes apostoli)に対する執り成しの祈りの箇所であるが、そのテキストには特定の使徒の名前が記されておらず、祈願者が選好する任意の使徒へ祈りが捧げられるようになっている²⁰。

このように、suffrageの祈願対象は個々に見ていくなれば非常に多様である。とはいえ、広義の意味での聖人——神以外の聖なる存在者——を主要な祈願対象としている点はこの時祷書も一貫している。したがって、この祈りは主要には「聖人への祈り」であると言える。

【テキスト】

suffrageのテキストは、その多くが聖務日課と同様の構成を取っている。すなわち、交唱(antiphona)、先唱(versus)、答唱(responsorium)、祈願(oratio)の四つの祈文によって構成されている。また、個々のテキストは聖務日課書やミサ典書などを典拠としていることが多い²¹。

時祷書研究者であるWieckの分析に基づくと、これらのテキストからは二種類の特性が見出される。一つは当該聖人の「讃美」(praise)であり、いま一つは「請願」(petition)である²²。交唱・先唱・答唱の箇所は一連の讃美となっており、祈願の箇所の後半は常に請願になっている、というのがWieckの分析である。これらの特性について、『ロアン大時祷書』におけるアレクサンドリアの聖カタリナへの祈りを例に、具体的に確認したい²³。

| 資料名 | テイマウス時禱書 | ロアン大時禱書 | マリ・ド・ブルゴーニュの時禱書 | ヘンリー八世の時禱書 | ダ・コスタ時禱書 |
|---------------|---------------------------|--------------------|----------------------|---------------------|--------------------|
| 使用式/製作 製作年 | ソールズベリ/イギリス c. 1325-40 | パリ/フランス c. 1420 | ローマ/フランドル c. 1477 | ローマ/トゥール c. 1500 | ローマ/ゲント c. 1515 |
| 祈願対象 (記載順) | 聖霊 | 聖三位一体 | 大天使ミカエル | 聖三位一体 | 福音書記者ヨハネ |
| | 聖三位一体 | 聖ペテロ | 聖ペテロ | 大天使ミカエル | 福音書記者マルコ |
| | 聖十字架 | 聖パウロ | 聖クリストフォロス | 洗礼者ヨハネ | 福音書記者マタイ |
| | 大天使ミカエル | 洗礼者ヨハネ | 聖ゲオルギウス | 福音書記者ヨハネ | 福音書記者ルカ |
| | 洗礼者ヨハネ | 福音書記者ヨハネ | 聖セバスティアヌス | 聖ペテロと聖パウロ | 大天使ミカエル |
| | 聖ペテロと聖パウロ | 聖ヤコブ | 聖アドリアノ | 聖ヤコブ | 洗礼者ヨハネ |
| | 聖ステファノ | 聖アンデレ | 聖ニコラオス | 聖フィリポ | 聖ペテロと聖パウロ |
| | 聖アンデレ | 聖アントニオス | 聖コルネリウス | 聖クリストフォロス | 聖アンデレ |
| | 聖ラウレンティヌス | 聖ラウレンティヌス | 聖アントニオス | 聖セバスティアヌス | 聖ヤコブ |
| | 聖トマス・ベケット | 聖クリストフォロス | 聖エリギウス | 聖クラウディウス | 聖トマス |
| | 聖ニコラオス | 聖セバスティアヌス | 聖バーフ | 聖アドリアノ | すべての使徒 |
| | 聖カタリナ | 聖イヴォ | マグダラのマリア | 聖ニコラオス | 聖ステファノ |
| | 聖マルガリタ | 聖ゲオルギウス | 聖カタリナ | 聖アントニオス | 聖ラウレンティヌス |
| | マグダラのマリア | 聖ニコラオス | 聖バルバラ | 聖フランチェスコ | 聖セバスティアヌス |
| | すべての聖人 | 聖マルティヌス | 聖ウィルゲフォルティス | パドヴァの聖アントニオ | 聖クリストフォロス |
| | 平和 | すべての神に選ばれし者 | | 聖アンナ | 聖ゲオルギウス |
| | | 聖母マリア | | マグダラのマリア | すべての殉教者 |
| | | 聖アンナ | | 聖カタリナ | 聖ヒエロニムス |
| | | 聖カタリナ | | 聖マルガリタ | 聖アウグスティヌス |
| | | 聖マルガリタ | | 聖バルバラ | 聖ベルナルドゥス |
| | マグダラのマリア | | 聖マルタ | 聖ベネディクトゥス | |
| | 聖アポロニア | | すべての聖人 | 聖フランチェスコ | |
| | すべての処女 | | | パドヴァの聖アントニオ | |
| | | | | 聖ドミニクス | |
| | | | | 聖ベルナルディーノ | |
| | | | | 聖オヌフェリオス | |
| | | | | 聖ロクス | |
| | | | | すべての証聖者 | |
| | | | | 東方三博士 | |
| | | | | 聖アンナ | |
| | | | | 聖カタリナ | |
| | | | | マグダラのマリア | |
| | | | | 聖エリザベト | |
| | | | | 聖ヘレナ | |
| | | | | 聖アポロニア | |
| | | | | 聖ルチア | |
| | | | | 聖ウルスラ | |
| | | | | 11000人の処女たち | |

表1 諸時禱書における執り成しの祈りの祈願対象とその序列

De sancta katherine.

Antiphona. Virgo sancta katherina graeciae
gemma urbe alexandrina costi regis erat filia.

Versus. Diffusa est gratia in labiis tuis.

Responsorium. Propterea benedixit te deus in
aeternum.

Oratio. Deus qui dedisti legem Moysi in
summitate montis Synay in eodem loco per
sanctos angelos tuos corpus beatae katherinae
uirginis et martyris tuae mirabiliter collocasti
tribue quaesumus domine ut eius meritis precibus
intercessione ad montem qui christus est
ualeamus peruenire. Per dominum.

〔下線部のテキストは引用者による補完²⁴〕

聖カタリナについて

- 〈交唱〉 ギリシアの宝石、処女聖カタリナ、アレクサンドリアの都にて、貴女はコンストゥス王の娘であられた。
- 〈先唱〉 文雅その唇にそそがる。
- 〈答唱〉 このゆえに神はとこしえに汝を祝福したまえり。
- 〈祈願〉 神よ、シナイ山の頂にてモーセへ律法を授けられた方よ。あなたはかの地に、あなたの聖なる天使を通じて、あなたの処女にして殉教者である至福なるカタリナの遺体を驚くべき仕方運びたもうた。主よ、与えたまえ、われらは求む。彼女の功德と祈りと執り成しによりて、われらがキリストの在す山の頂へと至らんことを。主を通じて。

上記のテキストはアレクサンドリアの聖カタリナへの祈りの全文である。

交唱の箇所では聖カタリナの出自が語られている。「ギリシアの宝石」と言われているように、この箇所は讚美のテキストである。この箇所は「喜べ、処女カタリナ」(Gaude virgo Katherina...) ²⁵のような

別のテキストに変わることもあるが、讚美のテキストという点では一貫している。

先唱・答唱の箇所では、聖カタリナが恩寵(文雅)を授かっており、神に祝福された者であったことが語られている。その文言は『詩編』第45篇第2節からの引用である。これらの箇所も交唱に続いて讚美のテキストとなっており、Wieckの分析している通りである。しかしこれらの箇所は、「われらのために祈りたまえ、至福なるカタリナ」(ora pro nobis beata Katherina)と「キリストの御約束に適わしめたまえ」(Ut digni efficamur promissionibus Christi)に変わることもある²⁶。「われらのための祈りたまえ」と「キリストの御約束に適わしめたまえ」は聖人への祈りの定型文であり、suffrageにおいてもさまざまな聖人への先唱・答唱に割り当てられている。その場合、これらの箇所は讚美ではなく聖人への請願となる。

最後に、祈願の箇所において、神および聖カタリナに対する請願の言葉が記されている。Wieckによれば、この箇所の前半は当該聖人の生涯や聖性に關する言及であり、後半は常に請願となっている。この分析は的を射ている。前半部では、『出エジプト記』の律法授与と関連させつつ、聖カタリナの遺体がシナイ山へ運ばれたことが語られている。このエピソードは聖カタリナが殉教後に天使によってシナイ山へ運ばれてそこに埋められた——そして後に、その場所に教会と修道院が建てられた——という聖人伝に由来している²⁷。この神秘的な出来事への言及に続いて、後半部では、聖カタリナの功德と祈りと執り成しによって「キリストの在す山」の頂へと至らせてくださいと請願されている。キリストの在す山とは、聖カタリナの聖人伝に關連するシナイ山であり、同時にキリストの御許それ自体を示していると考えられる。つまり、ここで請願されているのはキリストへの上昇である。また、この箇所は神(主)が祈りの対象として呼びかけられているが、請願内容に聖カタリナの執り成しも含まれていることから、神と聖カタリナの双方に対する請願であると考えられる。末尾の短い一文「主を通じて」は祈りを締めくくる定型文であり、請願内容が最終的には誰に

よって成就されるのかが端的に言い表されている。これも請願のテキストの一部であると考えられる。

したがって、テキストの全体は、聖カタリナの讚美に始まり彼女の執り成しによるキリストへの上昇の請願に帰着する、という構造になっている。そのため、上記のテキストに即して言えば、suffrageは「聖人の讚美」と「聖人の執り成しによる何らかの請願」という二つの焦点が存していることになる。

以上より、祈願対象とテキストの内容を併せて考えれば、suffrageは次のような祈りであると言えることができる。すなわち、suffrageという祈りは、聖人への祈りの一種であり、具体的には「聖人の讚美」と「聖人の執り成しによる何らかの請願」が唱えられる祈りである、と。したがって、suffrageという祈りは、「聖人の讚美」に着目すればsuffragia(支持)やmemoriae(記念)というラテン語の呼称がまさしくその特徴を言い表していると言えるし、「聖人の執り成しによる何らかの請願」に着目すれば、「執り成しの祈り」という訳語がその特徴を的確に言い表していると言える。

時祷書の所有者たちは、上記のような祈りを日々聖人たちへ唱えており、それが彼らの信仰活動の一つであった。カトリックの伝統を考えれば、この種の祈りが教会から公認されていたのは明らかである。では具体的に、当時の神学者たちはどのような根拠に基づいてこの種の祈りを認めていたのだろうか。

3. 中世後期における祈禱論

中世後期における祈禱論は、それまでの世紀を通じて形成されてきた神学的伝統を継承しつつ、そこに各々の神学者の見解が組み込まれている傾向にある。たとえば、ヨハネス・ダマスケヌスによる「祈りとは精神の神への上昇である」(oratio est elevatio mentis in Deum)や「祈りとは神から適わしい事柄を請願することである」(oratio est petitio decentium a Deo)という定義²⁸は、東方のみならず、西方の多くの神学者も受容している伝統的な定義であり、中

世の多くの神学者たちはこの定義を土台として各々の祈禱論を展開していた。したがって、この伝統的な定義に親しんでいた中世の神学者たちにとって、祈りとは神への上昇・請願に他ならず、ともすれば祈りとは神に対して捧げるものであるという観念が彼らには定着していたと考えられる。

とはいえ、第1節で述べたように、中世は聖人崇敬が盛んな時代であり、聖人へ祈るという行為も伝統的に行われてきた。そして神学的にはここに大きな問題が存している。なぜならば、祈りとは神への上昇・請願であり、この定義に厳密に従うならば、神以外は祈りの対象として認められないからである。したがって、神への上昇・請願という定義を受容しつつ、聖人への祈りという伝統も認めようとするならば、聖人への祈りの正当性を肯定するための何らかの「根拠づけ」が必要となってくる。言い換えれば、ラトレイア(ラトリア)とプロスキュネーシス(デュリア)が両立可能である(両立すべきである)神学的根拠が必要となってくる。そしてその根拠は、神学者によってさまざまであった。

結論から言えば、神学者たちが聖人への祈りを正統な信仰活動として認める根拠には、少なくとも「神への祈りとの区別」、「聖書の典拠」、「神の意志」、「神への祈りの代替としての有効性」の四つが認められる。これらの根拠は、序論で挙げた三名の神学者、すなわちトマス・アクィナス、ジャン・ジェルソン、ヘラルト・ゼルボルトらの祈禱論に基づいている。したがって、これより三者の祈禱論をそれぞれ分析しつつ、上述の諸根拠について確認していきたい。

3-1. トマス・アクィナスの祈禱論

アクィナスにとって祈りとは、神に対して崇敬を示す行為、すなわち敬神(religio)に属する行為である。というのは、「彼(神)に従属し、自身の諸々の善の創り主として彼が必要であることを祈ることで明らかにする限りにおいて、ひとは祈りによって神に崇敬を示す」²⁹からである。また、アクィナスの祈禱論は彼以前の神学的伝統を継承しており、ダマスケヌスによる神への上昇および請願という定義も

受容している³⁰。

したがって、アキナスの祈禱論における主要な祈願対象は神であると言える。しかし、神に近い存在者であるところの聖人たちもまた、祈願対象として認められている。アキナスは主著『神学大全』において「神に対してのみ祈るべきか」³¹という問題を取り挙げており、そこで次のように回答している。

誰かに対する祈りというのは、次の二つの仕方
で捧げられる。第一は、いわばその者を通じて
成就されるべきものとして。第二は、その者
を通じて聞き届けられるべきものとして。ところ
で、第一の仕方によって我々が祈りを捧げるの
は、神に対してのみである。なぜならば、我々
のすべての祈りは恩寵と栄光を獲得することへ
と秩序づけられるべきであるが、それらと与え
るのは神のみだからである。そのことは『詩篇』
〔第83篇第12節〕に「主は恩寵と栄光を与えたま
うであろう」と言われている如くである。しか
し、第二の仕方では、我々は聖なる天使たちや
人間たちに祈りを捧げる。それは、彼らを通じ
て神が我々の請願を認知したまうためではなく、
彼らの祈願と功德によって我々の祈りが効果
あるものとなるためである。そのため、『ヨ
ハネの黙示録』第8章〔第4節〕では「香の煙、す
なわち聖なる者たちの祈りは、天使の手から
神の御前にたち昇った」と言われているのであ
る³²。

〔下線引用者〕

上記のテキストにおいて、アキナスは神も聖人
たちも祈願対象となり得ることを認めつつ、両者
に対する祈りを峻別している。聖人への祈りは、敬神
の行為としての神への祈りとは内実が異なってい
る。なぜならば、敬神の行為としての祈りとは、「自
身の諸々の善の創り主として彼が必要であることを
祈ることで明らかにする」行為のことであり、その
対象となり得る「彼」は、唯一の創造者である神のみ
だからである。むしろ、聖人はそのような存在では

あり得ない³³。聖人への祈りは、聖人という卓越し
た功德の持ち主から神へと執り成してもらうための
祈りであって、聖人を敬神の対象としているわけ
ではないのである。

さらに、この二つの祈りの区別は聖書にも示唆さ
れているとアキナスは考えており、その論拠とし
て『詩篇』と『ヨハネの黙示録』の聖句が引用されて
いる。これらの箇所は、いわば聖書の典拠である。ま
た、アキナスは同項の反対異論において『ヨブ記』
第5章第1節の「呼んでみよ、あなたに答える者が
いるかどうか、そして聖者のなかのだれかを頼りと
せよ」³⁴という聖句を挙げており、この箇所も聖人
への祈りが認められるべき聖書の典拠の一つとされ
ている。

ところで、神のみが祈りを成就させ、聖人がその
仲介を担う存在であるとするならば、祈願対象とな
る聖人は神に近ければ近いほど良いように思われ
る。地上の国家に喩えれば、王への請願を取り次い
でもらう人物は、城の一兵士よりも大臣の方が望ま
しい、というのと同様である。この考え方をさらに
進めると、祈願対象は神に近い上位の聖人だけで
良いのではないか、ということにもなる。しかしな
がら、このような異論に対して、アキナスは上位
の聖人のみならず下位の聖人にも祈るべきである
という立場を取っている。

神は下位の者たちがすべての上位の者たちによ
って助けられることを意志したまう。そのため、
上位の聖人たちだけでなく下位の聖人たち
にも祈願するのでなければならない。さもな
くば、神の憐れみのみを祈願すべきであるとい
うことになるであろう³⁵。

ここでアキナスは、上位の聖人にも下位の聖人
にも祈るべきである根拠として、「下位の者たちが
すべての上位の者によって助けられること」を望む
神の意志を挙げている。ここで語られている神の意
志は、アキナスが「神の統宰」(divina gubernatio)
として論じている世界支配の秩序に即している。

アクィナスの神学においては、神のみが世界の統率(何らかの摂理に基づく善への方向付け³⁶)を行っているわけではなく、神以外の上位者たちの仲介を通じても統率が行われている。というのは、神のみが万物を善へと導くよりも、神によって善へ導かれた者がさらに別の者を善へと導く方がより優れた統率方法だからである³⁷。つまり、この世の人間たちは神によって善へと導かれているだけでなく、天使や聖人といった上位者たちの仲介を通じても善へと導かれているのである。ゆえに、この世の人間たちは、神のみならず、自分たちを助けてくれるであろう天使や聖人たちのすべてに、祈りによって助けを請わなければならない、それが神の意志するところである、とアクィナスは考えているのである。

以上より、アクィナスが聖人への祈りを正統な信仰活動として認める根拠は次のようにまとめることができる。第一に、聖人への祈りは聖人を介した神への請願という執り成しの祈りであり、敬神の行為としての祈りではない。第二に、第一に述べた理由は聖書にも示唆されている。第三に、聖人たちへ祈ることは神の意志する世界統率の秩序に適っている。これら三点がアクィナスの祈禱論における聖人への祈りを肯定すべき主要な根拠である。

3.2. ジャン・ジェルソンの祈禱論

ジェルソンの祈禱論は、サン・ヴィクトルのフォーゴーやオーヴェルニュのギョーム、ダマスケヌスらの影響が色濃く、神学的には神秘主義の伝統の中に位置づけられる。ジェルソンは、ダマスケヌスの伝統的な定義、すなわち神への上昇および請願という定義を受容しており³⁸、この点はアクィナスと同様である。

伝統的な定義を受容する一方、ジェルソンは祈りについての独自の考察も展開している。聖人への祈りについて言えば、彼は平信徒である自身の姉妹に宛てて著した信仰指南書『観想の山』において、とある人物の信仰実践を例にして次のように論じている。

私は次のような人物を知っている。すなわち、

自分は貧しく哀れな被造物であり、何も持っておらず、自身の努力を通じては何も獲得できないと見做すことで、自身を滅してその思考を合一・単純の状態にすることに大いに成功した人物を。彼は、天国の宮に住まうところの、豊かで充実した、驚くほど寛大で愛のある者たちに対して霊的な善の施しを請い求める状態になろう、と考えていた。そして彼は、隠れた場所にある庭の木の下に座して、自身をその状態へと置き、その場所で己の思考をいっそう長い間容易く大いに集中させた。それから、己の信仰心が動かすのに従って、彼は発話なしに或る聖人から他の聖人へと呼びかけていった。そうしながら、自身の必要としているものと貧困の状態を示しつつ、彼らの偉大なる恩寵と寛大さを想起しつつ、自身が神の前に現れるに値しないゆえに、聖人たちが彼のために神へ祈るように熱心に頼みつつ、彼はそれぞれの聖人たちに施しを求めた³⁹。

〔下線引用者〕

ジェルソンはこの人物について、イエスの「求めよ、さらば与えられん」(マタイ7:7、ルカ11:9)という言葉を真に理解していたとして、極めて高く評価している⁴⁰。換言すれば、この人物の祈り方は他の信徒たちにも推奨されるべきものである、と評価している。

ジェルソンの祈禱論の要点は、「自身の努力を通じては何も獲得できない」や「神の前に現れるに値しない」という極めて謙遜的な自己評価である。この心理を考慮して神ではなく聖人へ祈ることも認めるといふジェルソンの祈禱論は、唯一神の偉大さを教え込まれており、その偉大さに比べれば人間存在は卑小であるという価値観に慣れ親しんでいる中世の信徒たちにとって、非常に説得的であったはずである。実際、ジェルソンは素朴な信徒たちの信仰心に精通しており、彼らが神よりも聖人たちへ熱心に祈ることさえも、彼らの信仰の弱さへの配慮から容認していたほどである⁴¹。

とはいえ、ジェルソンの祈祷論においても神と聖人の立ち位置の逆転までは認められていない。「聖人たちが彼のために神へ祈るように」の箇所において明らかな如く、請願内容を成就するのはあくまでも神であり、聖人への祈りとは、祈願者のために聖人から神へと執り成してもらう祈り——つまり、聖人への執り成しの祈り——なのである。

したがって、上記の祈祷論において、ジェルソンが聖人への執り成しの祈りを正統な信仰活動として認めていたことは明らかである。その根拠は、極端に謙遜的な性格の者が、神の代わりに聖人たちを祈願対象として祈ることで、霊的な善という請願内容の獲得に成功した、という信仰実践の実例である。換言すれば、神への祈りの代替として有効であったゆえに——あるいは、そのような有効性があるに違いないと確信していたゆえに——ジェルソンは聖人への祈りを正当な信仰活動として認めていたのである。

3.3. ゼルボルトの祈祷論

ゼルボルトの神学は、ジェルソンと同様、神秘主義の伝統に位置づけられる。彼の名著『霊的上昇について』は、「新しき信心」の理論と活動に大きな影響を与えた信仰指南書である。彼はこの著作の中で、祈りとは「神に忠実である者の熱情であり、彼に仕える者の何らかの敬虔な語り掛けである」(*Est oratio hominis Deo adhaerentis affectio, et familiaris quaedam et pia allocutio*)⁴²と定義している。この定義がダマスケヌス以来の伝統的定義、すなわち神への上昇・請願を意識したものであることは明らかであろう。

上記の定義を基本としつつ、ゼルボルトは神への祈りとは区別された聖人への祈りについて次のように語っている。

さらに、祈りにおいてあなたの良心があなたを悩ませる時、またあなたが怖れによって動揺し、キリストへ忠実に讃美することに怖気づいている時には、至福なるヨブの助言に従って、聖人

たちの一人を頼りとし、その人があなたのために祈ってくれるよう懇願しなさい。——その類の祈りは請願(*postulatio*)と呼ばれるものである。「聖なるマリアよ、わたしのために祈りたまえ」と呼ばれる祈りなどが、それにあたる⁴³。

ここでゼルボルトは、神への祈りとは区別された *postulatio* と呼ばれる祈りを信徒たちに推奨している。その説明から明らかな通り、*postulatio* とは聖人に対して神への執り成しを請願する祈り、つまり聖人への執り成しの祈りである。

ゼルボルトは聖人への祈りを信徒たちに推奨しているが、そこには二つの条件が設けられている。その条件とは「あなたの良心があなたを悩ませる時」と「あなたが怖れによって動揺し、キリストへ忠実に讃美することに怖気づいている時」である。これらの条件に当てはまらない場合、明言されていないが、聖人よりも神へ祈ることの方が推奨されていると考えられる。なぜならば、ゼルボルトにとって祈りとは、第一義的には「神に忠実である者の熱情であり、彼に仕える者の何らかの敬虔な語り掛けである」からである。つまり、主要には神に対して祈るべきであるが、何らかの事情で神に祈ることができない状況ならば聖人への祈りが推奨される、というのがゼルボルトの祈祷論なのである。

また、「至福なるヨブの助言に従って」と言われているのは、旧約聖書の『ヨブ記』第5章第1節に「聖人たちの一人を頼りとせよ」という聖句が記されているからだと考えられる。この聖書的典拠の引用はアキナスと同様である。

したがって、ゼルボルトが聖人への祈りを正統な信仰活動として認めている理由は二つである。一つは、神へ忠実に祈ることができない状況において、聖人が神に代わる祈願対象となり得るからである。つまり、神への祈りの代替として、ゼルボルトは聖人への祈りという信仰活動を認めているのである。この根拠づけはジェルソンのそれと同様であるが、両者の理論には微妙な差異も存している。すなわち、ジェルソンの理論では神・聖人の偉大さと祈願者の

無価値さの対比が強調されているのに対して、ゼルボルトの理論では祈願者の「良心」や「怖れ」が焦点となっている。つまり、どちらも祈願者の自己認識を焦点としているが、ジェルソンのそれは相対的な自己認識であるのに対して、ゼルボルトのそれは祈願者の心情のみに基づく自己認識となっているのである。

いま一つは、聖書的典拠である。旧約聖書には、義人たちが神に執り成しを請うエピソードが数多く存在する⁴⁴。前述の『ヨブ記』第5章第1節もそれらの箇所の一つであり、ゼルボルトはこの箇所を聖人の執り成しが正統信仰である根拠として提示しているのである。

4. 聖人へ祈ることの信仰的意義

前節では、聖人への祈りが正統な信仰活動として肯定されるべき神学的根拠を提示した。本節では、それらの諸根拠に即して、聖人へ祈ることの信仰的意義を明らかにしたい。

まず前提として言えるのは、聖人への祈りとは聖人に神への執り成しを請う祈りであり、神への祈りとは異なる祈りである、ということである。この「神への祈りとの区別」は、前節の神学者たちが共通して認めているところである。したがって、この共通見解に合致しているところの時祷書における執り成しの祈り(suffrage)は、彼らの神学的解釈に即して言えば、正統な信仰活動であるということになる。とはいえ、この共通見解はsuffrageのような正しい聖人への祈りは崇敬行為であって崇拜行為ではないということを説明しているだけであり、その信仰活動の積極的な価値すなわち信仰的意義については何も語っていない。

彼らの祈禱論における聖人へ祈ることの信仰的意義は、上記以外の諸根拠と対応している。それらを要約して列挙すると、以下の通りとなる。

- (1) 聖書を典拠とする信仰活動であること(アキナス・ゼルボルト)
- (2) 神の意志する世界統宰の秩序に適っている

こと(アキナス)

- (3) 神への祈りの代替になり得ること(ジェルソン・ゼルボルト)
 - 3-1. 自分は神へ直接祈るに値しないと考える者が行う祈りとして(ジェルソン)
 - 3-2. 神へ祈ることが困難な状況において行う祈りとして(ゼルボルト)

注目すべきは、アキナスの「神の意志する世界統宰の秩序」が主として神の側から考えられた論拠であるのに対して、ジェルソン・ゼルボルトらの「神への祈りの代替」は祈願者の側から考えられた論拠であるという点である。この視点の違いは何に起因しているのだろうか。

可能性としてまず想定されるのは、各著作が主要な対象としていた読者の違いである。祈禱論を引用した著作は、アキナスは神学の初学者のために著した『神学大全』であり⁴⁵、ジェルソンは平信徒たちの指針となることを企図しつつ自身の姉妹に宛てて著した『観想の山』であり⁴⁶、ゼルボルトは「新しき信心」の信徒たちに推奨されていた『霊的上昇について』である⁴⁷。つまり、アキナスが知的・信仰的エリートである神学者を主要な読者として想定していたのに対して、ジェルソンは神学者でも聖職者でもない平信徒たちを、ゼルボルトは「新しき信心」に属する多様な社会階層の信徒たちを想定していたのである。ゆえに、ジェルソンとゼルボルトの祈禱論においては、信仰に対する自己評価が低く、実際に信仰心が揺れやすいという平信徒が共感しやすい信徒像が想定され、その在り方に即した解釈になっていたのだと考えられる。また、ジェルソンたちとは異なって、神学者たちに向けて普遍的な神学的学知として語っていたからこそ、アキナスの祈禱論は神の意志と世界の秩序を中心に据えた解釈になっていたのだと考えられる。

さらに、三者が生きていた時代・環境の差異も、祈禱論の違いに関係していると考えられる。そしてこの差異には時祷書という要因も大きく関わっている。

アキナスが活動していた13世紀は、いわば時祷書の黎明期であり、製作数もそれほど多くなかったと考えられている。ともすれば、アキナスは時祷書というツールを用いて聖人へ祈りを唱える平信徒の存在についてはさほど意識していなかったはずである。むしろ、聖人崇敬は時代全体の流行であったから、アキナスが平信徒と聖人への祈りの関係を見逃していたとまでは言えない。しかし、特別に強調して論じるほどの関心はなかったのだと考えられる。そのことは『神学大全』において当該主題が設けられていないことから明らかである。

これに対して、ジェルソンとゼルボルトが活動していた14世紀末から15世紀前半は、ちょうど時祷書が大量生産され始める過渡期に位置する⁴⁸。活版印刷術の普及以後とは比べるべくもないが、『ベリー公の美わしき時祷書』や『トリノ＝ミラノ時祷書』といった多くの有名な時祷書が製作されていた時期でもあり、少なくとも富裕層や貴族階級の間では時祷書という信仰の道具は知れ渡っていた。したがって、テキストの流布という観点から考えれば、ジェルソンとゼルボルトの時代は、それ以前よりも確実に聖人への執り成しの祈りを知る平信徒の数は多く、また実践者も多かったはずである。そのため、このような時代状況の中に生きており、かつ平信徒たちの信心と向き合いながら著述していたジェルソンとゼルボルトが、聖人への祈りと平信徒の信心の結びつきを意識して論じていたのは、むしろ自然なことだと言えよう。

アキナス、ジェルソン、ゼルボルトの三者はいずれも異なる境遇に生きていた。彼らが見つけていた信徒たちの姿は境遇に応じてそれぞれ異なっており、彼らとその祈論を役立てようと考えていた対象もまた異なっていた。特に、平信徒との関わりや彼らへの関心については、アキナスとジェルソン・ゼルボルトとで大きな違いがあった。つまるところ、この「まなざし」の差異が、同じ信仰活動についての神学的解釈に相違をもたらし、信仰的意義の説明に多様性を生じさせたのだと考えられる。

結 論

聖人への祈りは、中世を通じて信徒たちの間で盛んに唱えられていた祈りであり、中世後期には時祷書を通じて平信徒たちの間でも広く知れ渡っていた祈りである。この祈りは、さまざまな聖人たちに、彼らを讃美しつつ神への執り成しを請願するという類の聖人崇敬であり、神への祈りとは区別された祈りであった。その信仰的意義は同時代の神学者たちによってもさまざまに主張されており、具体的には、アキナス、ジェルソン、ゼルボルトらの祈論において「聖書を典拠とする信仰活動であること」、「神の意志する世界統宰の秩序に適っていること」、「神への祈りの代替になり得ること」という三つの信仰的意義が語られていた。このような信仰的意義が存しており、さらには神への祈りとも神学的に区別されているという根拠のゆえに、中世後期の神学者たちは聖人への祈りを正当な信仰活動として解釈しており、信徒たちにも推奨していたと考えられる。

カトリック教会は、16世紀のトリエント公会議において、聖人に執り成しを祈願することを自らの信仰内容として宣言している。そして現代に至るまで、この信仰活動はカトリックの伝統として引き継がれている。しかし、その伝統的な信仰活動に込められた想いは、時代によって、地域によって、さらに言えば個人によって様々であった。ゆえに、カトリックの神学者たちは、この多様性に答えるべく、それぞれが見つけていた信徒たちの信心に応じて、守るべき原則は維持しつつ、柔軟に聖人崇敬の議論を展開していたのではないだろうか。中世後期に流行していた聖人への祈りとその信仰的意義に関する神学者の諸解釈は、この歴史的事実の一端を示しているように思われる。

参考文献

【一次文献】

■時祷書(時系列順)

The Taymouth Hours, c. 1325-40, British Library, Yates Thompson MS. 13.

<https://www.bl.uk/catalogues/illuminatedmanuscripts/record.asp?MSID=8148>

Grandes heures de Rohan, c. 1420, Bibliothèque Nationale de France, MS. Latin 9471.

<http://gallica.bnf.fr/ark:/12148/btv1b10515749d#>

Hours of Catherine of Cleves, c. 1440, The Morgan Library and Museum, MS M.917/945.

<http://www.themorgan.org/collection/Hours-of-Catherine-of-Cleves>

Das Stundenbuch der Maria von Burgund, c. 1477, Österreichischen Nationalbibliothek, Codex Vindobonensis 1857.

Franz Unterkircher hrsg., *Das Stundenbuch der Maria von Burgund: Codex Vindobonensis 1857 der Österreichischen Nationalbibliothek, Kommentar von Franz Unterkircher*, Akademische Druck- u. Verlagsanstalt, Graz 1993.

Hours of Henry VIII, c. 1500, The Morgan Library and Museum, MS H. 8.

<http://www.themorgan.org/collection/Hours-of-Henry-VIII>

Da Costa Hours, c. 1515, The Morgan Library and Museum, MS M. 399.

<http://www.themorgan.org/collection/da-costa-hours>

『フランス時祷書「全使徒への祈り」』、1510-20、西南学院大学博物館

■神学

Augustinus. *Sancti Aurelii Augustini De civitate Dei*, Libri I-X, Corpus Cristianorum Series Latina 47, Turnhout, Brepols, 1955.

Gerard Zerbolt. *Piissimi ac eruditissimi viri D. Gerhardi Zvtphaniensis: opuscula duo, divina prorsus et aurea; I. De reformatione interiori, seu virium animae; II. De spiritualibus ascensionibus*, Coloniae, apud Ludouicum Alectorium, et haeredes Iacobi Soteris, 1579.

———. “*The Spiritual Ascents*.” John van Engen tr. In *Devotio Moderna: Basic Writings*, John van Engen ed., The Classics of Western Spirituality, New York/Mahwah, Paulist Press, 1988.

Jean Gerson. *Jean Gerson: Œuvres Complètes*, vols. 1-10, P. Glorieux ed., Paris, Declée, 1960-73.

———. *Jean Gerson: Early Works*, Brian Patrick MacGuire tr., The Classics of Western Spirituality, New York/Mahwah, Paulist Press, 1998.

Johannes Damascenus. *Joanni Damasceni opera omnia*, tomus 1. In J. -P. Migne ed., *Patrologiae cursus completus*, Series Graeca 94, 1867.

———. *Contra imaginum calumatores orationes tres*. Besorgt von P. Bonifatius Kotter, Berlin/New York, De Gruyter, 1975.

Thomas Aquinas. S. *Thomae Aquinatis doctoris angelici, Summa Theologiae: cura et studio Sac. Petri Caramello, cum textu ex recensione leonina*, Italy, Marietti, 1952-56.

トマス・アキナス『神学大全』、高田三郎ほか訳、創文社、1960-2012年

■その他

Declarationes illustrium Sacrae Romae Cardinalium Congregationis, ipsis Sacrosancti et Oecumenici Concilii Tridentini Canonibus et Decretis Insertae, Coloniae Agrippinae, apud Petrum Henningium, 1619.

【二次文献】

Anderson, Wendy Love. “Gerson’s on Woman.” In *A Companion to Jean Gerson*, Brian Patrick McGuire ed., Leiden/Boston, Brill, 2006, pp. 293-315.

Attwater, Donald. *The Penguin Dictionary of Saints*, Harmondsworth, Penguin Books, 1965.

Duffy, Eamon. *The Stripping of the Altars: Traditional Religion in England 1400-1580*, New Haven/London, Yale University Press, 1992.

Hartham, John. *Books of Hours and Their Owners*, London, Thames and Hudson, 1977.

Hobbins, Daniel B. “Gerson on Lay Devotion.” In *A Companion to Jean Gerson*, Brian Patrick McGuire ed., Leiden/Boston, Brill, 2006, pp. 41-78.

Leroquais, Victor. *Les livres d’Heures manuscrits de la Bibliothèque Nationale*, tome 1, Paris and Mâcon, Protat Frères, 1927.

Palazzo, Eric. *A History of Liturgical Books: from the Beginning to the Thirteenth Century*, Madeleine Beaumont tr., Collegeville, Pueblo, 1998.

Reinburg, Virginia. “Praying to Saints in the Late Middle Ages.” In *Saints: Studies in Hagiography*, Sandra Sticca ed., Binghamton, Center for Medieval and Early Renaissance Studies at the State of University of New York, 1996, pp. 269-282.

———. *French Book of Hours: Making an Archive of Prayer, c. 1400-1600*, Cambridge University Press, 2012 (Paperback edition 2014).

Thurston, Herbert J. and Attwater, Donald eds. *Butler’s Lives of the Saints: Complete Edition*, 4 vols, London, Burns and Oates, 1956.

Wieck, Roger S. *Time Sanctified: The Book of Hours in Medieval Art and Life*, New York, George Braziller/Walters Art Gallery, 1988.

———. *Painted Prayers: The Books of Hours in Medieval and Renaissance Art*, New York, George Braziller/The Pierpont Morgan Library, 1997.

内島美奈子、下園知弥「祈りの道具に見る聖と俗 時祷書を中心に」、『キリスト教の祈りと芸術 装飾写本から聖画像まで』所収、西南学院大学博物館研究叢書、花乱社、2017年、69-73頁

黒岩三恵「私的祈祷書類におけるイメージ機能の諸相：聖トマス・アキナス画像と祈文の問題を中心に」、『ことば・文化・コミュニケーション：異文化コミュニケーション学部紀要』第6巻、立教大学、2014年、49-86頁

鐸木道剛「もの」としての聖書、「もの」としてのイコン」、『キリスト教の祈りと芸術 装飾写本から聖画像まで』所収、西南学院大学博物館研究叢書、花乱社、2017年、66-69頁

松田隆美『ヴィジュアル・リーディング 西洋中世におけるテキストとバラテキスト』、ありな書房、2010年

山口隆介「トマス・アキナスの「祈り」概念」、『中世思想研究』第55号、知泉書館、2013年、48-64頁

註

- 1 Roger S. Wieck, *Time Sanctified: The Book of Hours in Medieval Art and Life* (New York, George Braziller/Walters Art Gallery, 1988), p. 27.
- 2 時祷書の所有者の社会的構成については次の文献を参照。Virginia Reinbrug, *French Book of Hours: Making an Archive of Prayer, c. 1400-1600* (Cambridge University Press, 2012 [2014]), pp. 49-52.
- 3 時祷書の主な構成要素については次の文献を参照。Victor

- Leroquais, *Les livres d'Heures manuscrits de la Bibliothèque Nationale*, tome 1 (Paris and Mâcon, Protat Frères, 1927), pp. xiv-xxxii; Reinbrug, *French Book of Hours*, p. 17.
- 4 時祷書におけるsuffrageについての代表的な先行研究は以下の通り。Leroquais, *Les livres d'Heures manuscrits de la Bibliothèque Nationale*, tome 1, p. xxii; Wieck, *Time Sanctified*, pp. 111-123; Wieck, *Painted Prayers: The Books of Hours in Medieval and Renaissance Art* (New York, George Braziller/The Pierpont Morgan Library, 1997), pp. 109-116; Reinburg, *French Book of Hours*, pp. 173-188.
- 5 トリエント公会議、第25総会、「聖人への祈願および崇敬、聖人の聖遺物、聖画像について」(De invocatione, veneratione et reliquiis sanctorum et de sacris imaginibus.)
- 6 中世後期という時代区分は一般的には14-15世紀頃とされている。本論文では、時祷書が製作・使用され始めていた13世紀も含めて、13-15世紀までを考察の主要な対象とする。
- 7 共同生活兄弟会および共同生活姉妹会の構成員については次の文献を参照。John van Engen ed., *Devotio Moderna: Basic Writings* (New York/Mahwah, Paulist Press, 1988), pp. 22-23.
- 8 Donald Attwater, *The Penguin Dictionary of Saints* (Penguin Books, 1965), p. 8-9.
- 9 現在のカトリックのシステムでは列聖と列福は区別されているが、両者の厳密な区別がなされるようになったのは近代以降である。したがって、中世においては聖人と福者の区別も厳密ではなかった。列聖・列福の成立過程については次の論文を参照。Herbert J. Thurston, "Beati and Sancti," in *Butler's Lives of the Saints: Complete Edition*, Herbert Thurston, Donald Attwater eds., vol. 4 (London, Burns and Oates, 1956), appendix II, pp. 667-671.
- 10 Herbert J. Thurston, "Beati and Sancti," p. 668.
- 11 Johannes Damascenus, *Contra imaginum caluminatores orationes tres*, III, 28: 鐸木道剛「もの」としての聖書、「もの」としてのイコン」、『キリスト教の祈りと芸術 装飾写本から聖画像まで』所収(西南学院大学博物館研究叢書、花乱社、2017年)、67頁。
- 12 *De Civitate Dei*, lib. X, cap. 1.
- 13 *Summa Theologiae*, II-II, q. 103, a. 3.
- 14 sacramentariumにはcommunicantesという聖人への執り成しを請う祈りが収録されており、この祈りは6-7世紀に作られたと考えられる。Cf. Eric Palazzo, Madeleine Beaumont tr., *A History of Liturgical Books: from the Beginning to the Thirteenth Century* (Collegeville, Pueblo, 1998), pp. 22.
- 15 聖職者や修道士たちが定められた時間に唱える聖務日課(officium)には聖人に対する執り成しの祈りが含まれている。そして聖務日課書とは、この聖務日課のための典礼テキストのすべてが収録されたものである。Cf. Eric Palazzo, Madeleine Beaumont tr., *A History of Liturgical Books*, p. 121-122; 169.
- 16 Virginia Reinburg, "Praying to Saints in the Late Middle Ages," in *Saints: Studies in Hagiography*, Sandra Sticca ed., (Binghamton, Center for Medieval and Early Renaissance Studies at the State of University of New York, 1996), p. 269.
- 17 Reinburg, "Praying to Saints in the Late Middle Ages," p. 269.
- 18 Reinburg, *French Books of Hours*, p. 13.
- 19 祈願対象の序列は、典型的には、三位一体の神に始まり、聖母マリア、大天使ミカエルおよび洗礼者ヨハネ、使徒、男性聖人(殉教者、証聖者)、女性聖人(処女の殉教者を筆頭とする)に終わる、とされている。この序列はしばしば「天上のヒエラルキー」(celestial hierarchy)の反映として説明されることがある(e.g., Wieck, *Painted Prayers*, p. 109)。しかし、この序列が本当にヒエラルキーの反映と言えるかは検討の余地がある。たとえば、男性の聖人が女性の聖人に先立つ序列のことをヒエラルキーと言って良いかは甚だ疑問であり、少なくともヒエラルキー概念の提唱者である擬ディオニュシオスやカトリック神学の権威であるトマス・アクィナスはそのような意味でヒエラルキー概念を語っていない。
- 20 西南学院大学博物館所蔵フランス時祷書「全使徒への祈り」におけるテキストの校訂・翻訳およびその解釈については次の論文を参照。内島美奈子、下園知弥「祈りの道具に見る聖と俗 時祷書を中心に」、『キリスト教の祈りと芸術 装飾写本から聖画像まで』所収、72頁。
- 21 Wieck, *Painted Prayers*, p. 109.
- 22 Wieck, *Painted Prayers*, p. 109.
- 23 *Grandes heures de Rohan*, Bibliothèque Nationale de France, MS. Latin 9471, fol. 232r.
- 24 テキストの補完箇所については、『ロアン大時祷書』の他の聖人への祈りの箇所や、他の時祷書における聖カタリナへの祈りを参照した。参照した他の時祷書は参考文献に挙げている通りである。
- 25 *Hours of Catherine of Cleves*, pp. 296-297.
- 26 *Da Costa Hours*, fol. 325r.
- 27 Herbert J. Thurston, Donald Attwater eds., *Butler's Lives of the Saints: Complete Edition*, vol. 4, pp. 420-421.
- 28 *De fide orthodoxa*, lib. 3, c. 24.
- 29 *Summa Theologiae*, II-II, q. 83, a. 3, cor.: Per orationem autem homo Deo reverentiam exhibet: in quantum scilicet se ei subiicit, et proficitur orando se eo indigere sicut auctore suorum bonorum. Unde manifestum est quod oratio est proprie religionis actus.
- 30 *Summa Theologiae*, II-II, q. 83, a. 1, cor.
- 31 *Summa Theologiae*, II-II, q. 83, a. 4: "Utrum solus Deus debeat orari."
- 32 *Summa Theologiae*, II-II, q. 83, a. 4, cor.: ...oratio porrigitur alicui dupliciter: uno modo, quasi per ipsum implenda; alio modo, sicut per ipsum impetranda. Primo quidem modo soli Deo orationem porrigitur: quia omnes orationes nostrae ordinari debent ad gratiam et gloriam consequendam, quae solus Deus dat, secundum illud Psalm. [Ps. 83, 12]: Gratiam et gloriam dabit Dominus. Sed secundo modo orationem porrigitur sanctis angelis et hominibus: non ut per eos Deus nostras petitiones cognoscat, sed ut eorum precibus et meritis orationes nostrae sortiantur effectum. Et ideo dicitur Apoc. 8, [4] quod ascendit fumus aromatum, id est orationes sanctorum, de manu angeli coram Domino.
- 33 *Summa Theologiae*, II-II, q. 83, a. 4, ad 1.
- 34 Iob 5:1; *Summa Theologiae*, II-II, q. 83, a. 4, s. c.: Voca ergo si est qui tibi respondeat: et ad aliquem sanctorum convertere.
- 35 *Summa Theologiae*, II-II, q. 83, a. 11, ad 4: ...Deus vult inferiora per omnia superiora iuvare. Et ideo oportet non solum superiores, sed etiam inferiores sanctos implorare. Alioquin esset solius Dei misericordia imploranda.
- 36 *Summa Theologiae*, I, q. 103, a. 1, cor.
- 37 *Summa Theologiae*, I, q. 103, a. 6.
- 38 *Lettre-traité De orationis conditione atque sanctitate (Œuvres Complètes*, vol. 2, 39).
- 39 *La Montaigne de Contemplation*, 39 (*Œuvres Complètes*, vol. 7[1], 297): Je conçois la personne qui pourfita moult pour soi reduire et mettre ses pensées a unité et a simplece pour ce qu'il regarda que c'estoit une poure miserable creature et n'avoit riens, et par son labour rien ne pooit acquerir. Si se pensa qu'il se metteroit a soi pourchassier et a querir aulmosnes des biens espi rituels envers ceulx de la court de paradis qui en estoient riches et plains, et si estoient larges et charitables a merveille. Si se mist desous un arbre en un jardin en lieu secret, et se mist a la guise ou il cuida le mieux penser a son aise et plus longuement. Lors se torna a

- requerir sans parler l'un saint apries l'autre, selonc que sa devotion li donnoit, en requerant a cascun leur aumosne, en monstrant sa necessité et indigence, en ramembrant leur grant grace et largesse, en depriant pour que li priaissent a Dieu, car il n'estoit mie digne de y comparoir.
- 40 *La Montaigne de Contemplation*, 39.
- 41 Daniel B. Hobbins, "Gerson on Lay Devotion," in *A Companion to Jean Gerson*, Brian Patrick McGuire ed. (Leiden/Boston, Brill, 2006), p. 42.
- 42 *De spiritualibus ascensionibus*, c. 43.
- 43 *De spiritualibus ascensionibus*, c. 46: Interdum cum te in oratione conscientia vrget, et Christum fidutialiter timore percussus adorare formidas secundum consilium beati Iob, conuertere ad aliquem sanctorum deprecare eum vt oret pro te, quod genus orandi dicitur postulatio. Clama sancta maria, ora pro me, etc.
- 44 ソドムのための執り成し(『創世記』18-33)、モーセによる主の説得(『出エジプト記』32:7-14など)、イザヤによる執り成しと嘆き(『イザヤ書』63:7-19)など。
- 45 *Summa Theologiae*, I, pr.
- 46 Hobbins, "Gerson on Lay Devotion," p. 52.
- 47 Engen ed., *Devotio Moderna: Basic Writings*, p. 56.
- 48 Reinburg, *French Books of Hours*, p. 15.

下園 知弥(しもぞの ともや) 藤川学園非常勤講師